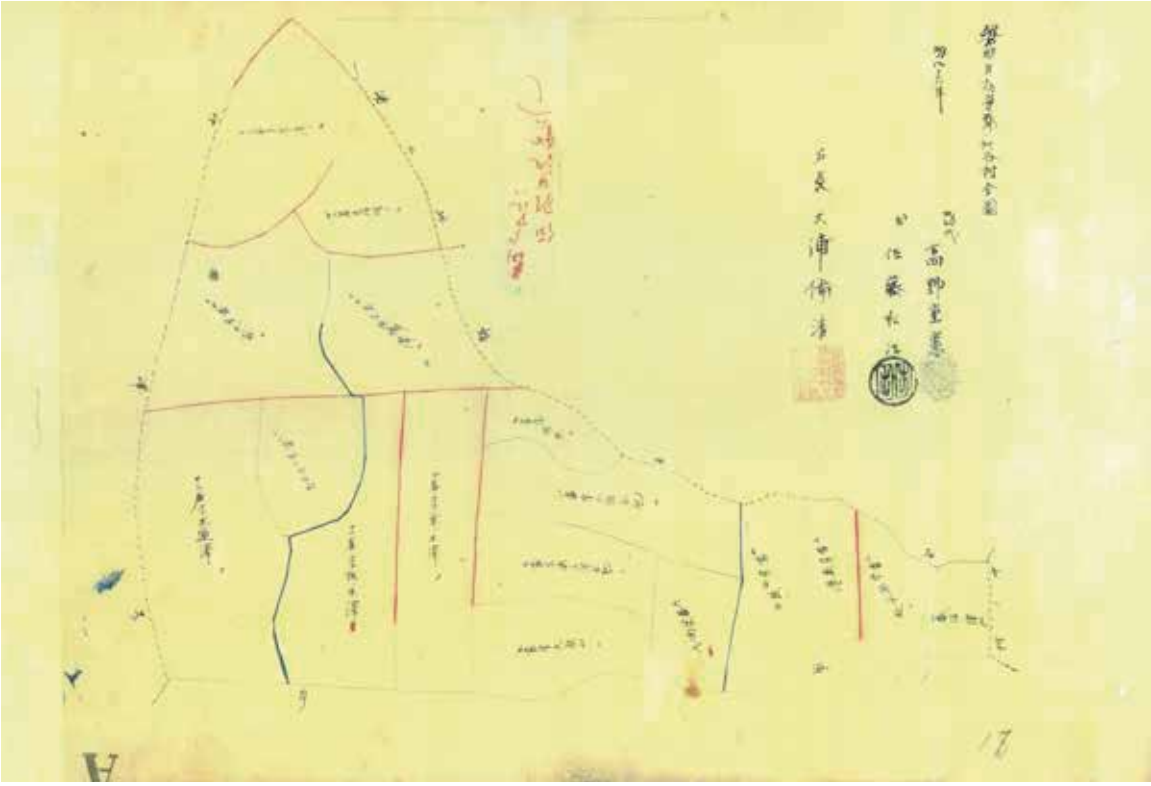
大字誌

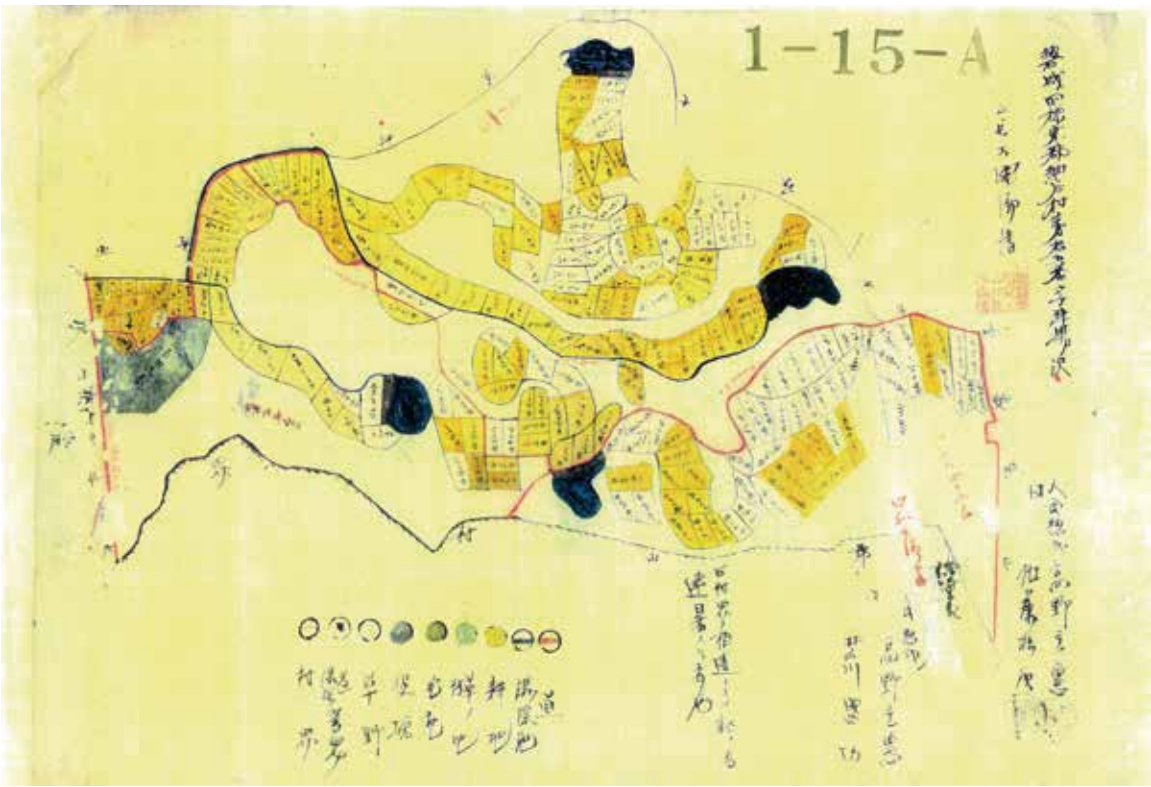
細谷

ほそや

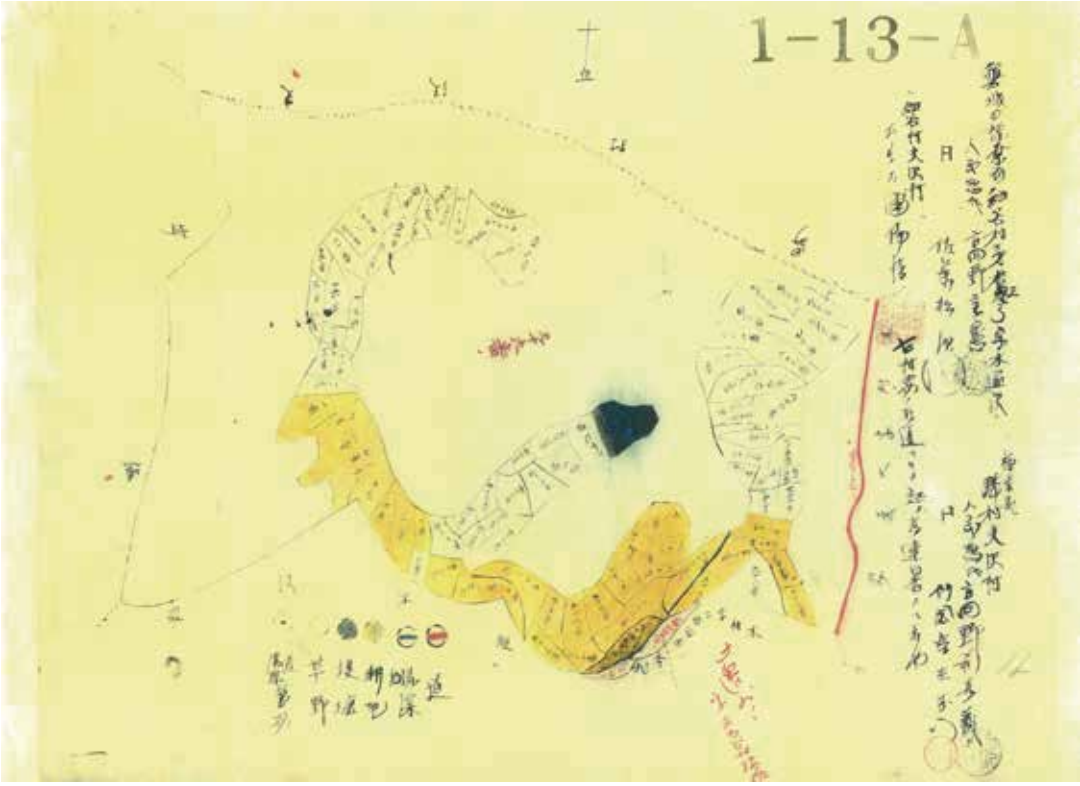
細谷の住宅地図（平成４年調整）：双葉町建設課提供



1. 明治期福島県地籍図（福島県歴史資料館所蔵）：細谷村全図（明治時代の細谷，p.1）



2. 明治期福島県地籍図（福島県歴史資料館所蔵）：陳場沢（じんばざわ）（細谷の稲作，p.10）



3. 明治期福島県地籍図（福島県歴史資料館所蔵）：木通沢（きどおりざわ）（細谷の稲作，p.10）

4. 飛行場跡地：住民提供（飛行場跡地，p.4）

5. 赤い野イチゴ（飛行場跡地, p.4）

6. 細谷川の河口付近（細谷の海，p.7）

7. 陳場沢川
（陳場沢川でフナ釣りをしていた，p.8）

8. ため池（つつみ）
（ザリガニやウナギを捕まえたり食べたりした, p. 8）

9. タバコの葉の編み込み再現
（葉タバコ栽培の1年，p.11）

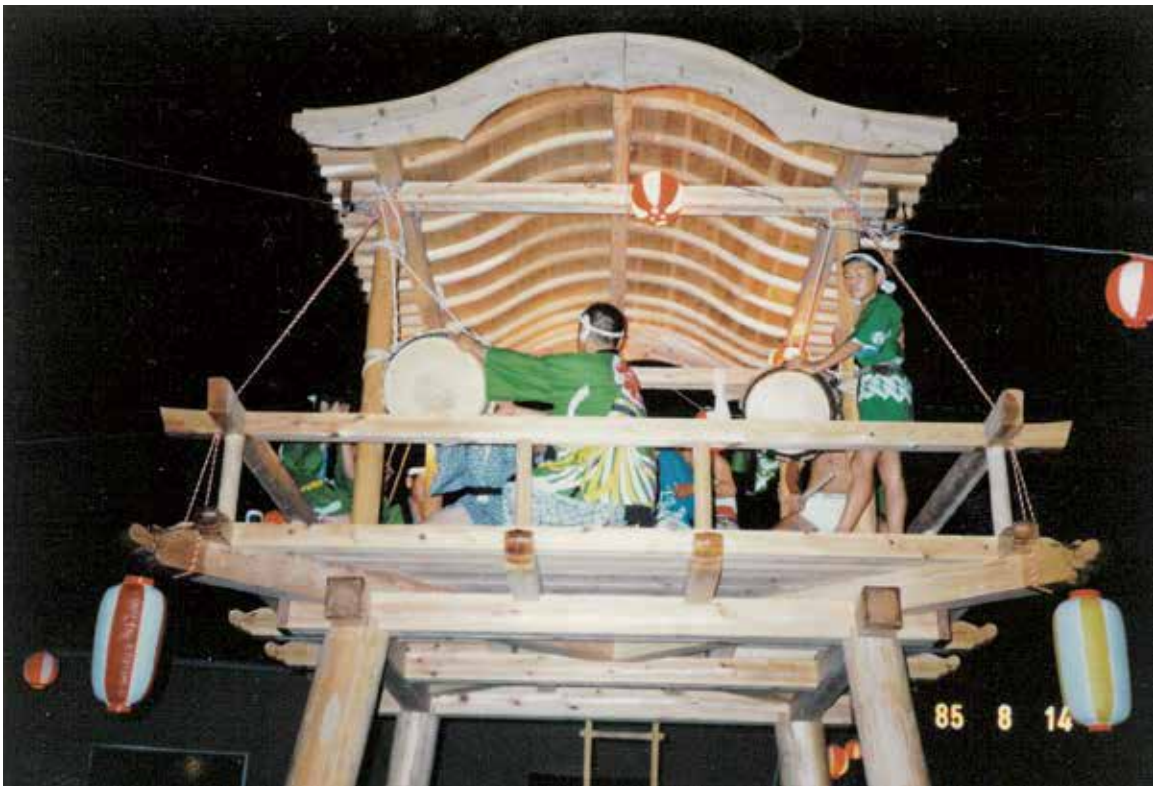
10. 菰の再現
（葉タバコ栽培の1年，p.11）

11. 黄色い野イチゴ（山菜，p.12）

12. 羽山（はやま）神社（羽山神社，p.13）

13. 屯所（屯所，p.13）

14. 集めた木材
（羽山神社の再建，p.14）



15. 櫓（やぐら）（盆踊り，p.17）

16. 盆踊り（盆踊り，p.17）

17. 町民運動会の昼食風景（細谷の年中行事，p.16）

18. 彼岸花を愛でる会（彼岸花の旅，p.22）

前日

当日

①

①

②

③

④

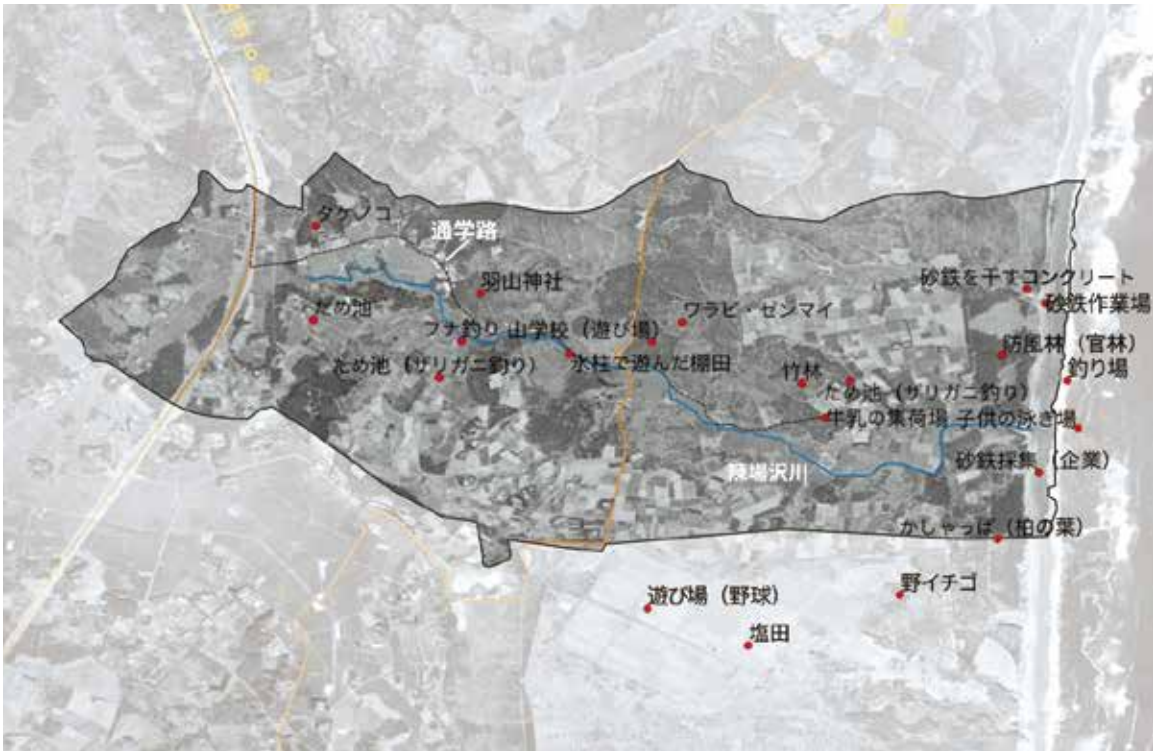
⑤

青いところがあるので
蒸し時間が足りない

19. かしわ餅の作り方（かしわ餅作り，p.25）

記憶地図

第二章細谷の記憶に登場する思い出の場所を、一九六三年（昭和三八年）、一九七五年（昭和五十年）、二〇〇〇年（平成十二年）に撮影された三枚の航空写真上で示したものです。東京電力福島第一原発の建設工事により、地形が変わり、生活の場所も変わったことが分かります。



昭和 30 年頃の記憶
出典：国土地理院の航空写真（1963 年撮影）を加工して作成

昭和 50 年頃の記憶
出典：国土地理院の航空写真（1975 年撮影）を加工して作成

平成 10 年頃の記憶
出典：国土地理院の航空写真（2000 年撮影）を加工して作成

故郷への想いを託す

故郷双葉町は緑が豊富で、山菜等四季折々の幸に恵まれ穏やかで住みよい環境にありました。私の暮らした細谷行政区は、四五世帯人口一六〇人ほどで、三世代同居が当たり前で四世帯同居の家庭もあり地区全体が顔見知り。地区に隣接して、東京電力福島第一原子力発電所が立地し、二〇一一年当時、最も近い家は、フェンスから三〇メートルほどでした。二〇一一年三月十一日十四時四六分、震度七の大地震発生に続き津波の襲来。私は、細谷行政区長として地区内巡視しましたが、幸い人的被害はありません。

しかし、倒壊家屋数軒、大半の家屋が何らかの被害を受け、道路に亀裂が走り、車での走行は困難を極めました。そして、十七時半頃「原子力発電所から三キロメートル以上に緊急避難」の防災無線が流れ、町内の公民館に避難。翌日避難指示区域は半径十キロメートル、二〇キロメートル、三〇キロメートル圏内に拡大しました。翌日に帰れるものと思い、ほとんどの細谷町民は、着のみ着のまま避難しましたが、再び慣れ親しんだ生活に戻る事はなく、かつての地域コミュニティは失われました。

二〇一五年一月双葉町が中間貯蔵施設建設受け入れを容認し、細谷地区の大部分が中間貯蔵施設工区となり、訪れるたびに故郷の風景は、思わず息を呑むほど様変わりしていました。比較的落ち着いた避難先での生活の中で、「心だけでも故郷に帰還したい」、そんな事を考える日々が続きます。同時にかつてのようなコミュニケーションを取り戻し細谷の記憶を次世代に継承する責務があると思う中で、細谷史の編纂は嬉しく大変貴重な事と思いました。さらなる双葉町の復興もこの目で見たい、次の世代や町外の人々が魅力を感じ交流拡大につながる新生双葉町になって欲しい…。

戻れなく失われた故郷ですが、未来に向けて、避難後も自分のできることに尽力してきました。羽山神社の社殿は震災前に新築を計画していたが、老朽化と大震災により倒壊、役場及び環境省の理解の下、再建を果たし、春には例大祭を開催しています。

また、震災前、細谷地区内町道に植え、避難後見事に咲き始めた彼岸花の球根を、二〇一七年に避難指示が解除され御縁があった川俣町山木屋地区に移植し、毎年秋に、「彼岸花を愛でる会」として細谷、双葉町、山木屋支援ＧＲＯＵＰの方たちが集い、交流の輪が広がりました。彼岸花の一部をいつか双葉町に、里帰りとして移植する事を目指しています。その彼岸花の移植や毎年の集いで知り合った産業技術総合研究所や神戸大学の皆さんと、この大字誌を作り後世に残そうとなりました。多くの人のその繋がりから生まれた本誌を私どもの末裔に継承し、双葉町の未来への想いを託します。原発事故による長期避難は理不尽極まりない経験でしたが、自分の人生と同じように、わが町も多くの人のつながりの中で復興を遂げることを念じてやみません。

双葉町細谷行政区　元区長　大橋庸一

記憶の伝承に向けて

二〇一一年の三月十一日の東日本大震災と、世界最悪とも言われた原発事故により始まった避難生活から、早くも十二年の月日が過ぎようとしています。あれ以来、もう二度と自宅に戻れないという事態になりました。

震災前には四世代十人家族で暮らしていた大切な家があり、私なりに色々と苦労して建てた思い出深い家でした。木材も長い時間をかけ自前で準備をし、近所の工務店にお願いをして建ててもらいました。庭には石塔があり、池では鯉が泳ぎ、成人式の日には写真を撮る娘たちの姿がありました。その思い出の家が、一時帰宅をした時には家の中までが獣に荒らされていて、見るも無残な状態で本当に悲しく心が折れそうな思いでした。その後、大字細谷地区は大半が中間貯蔵施設の用地となり、私の家もその中にあり母屋は解体されました。そのことを受入れる苦痛は言葉にするのが難しいほどでした。このような色々な経験をしたことで、過去のことはあまり振り返らず現実を直視し、孫たちの成長を楽しみにしながら穏やかに暮らしたいという思いもあります。

細谷地区は、原子力発電所事故が起こる前までは緑豊かな自然溢れる集落でした。しかし、一時帰宅をするたびに中間貯蔵施設建設工事のために原形をとどめぬほどの変わり行く故郷を見ていく中で、多くの先人たちが何世代にもわたり築き上げてきた生活の様式や文化が忘れ去られてしまうことが非常に残念でなりません。そうした生活は細谷に住み続けていれば孫たちにも自然に伝わるはずでした。それができない今、何か記録に残さなければこの細谷地区がなくなってしまいます。そんな時に、山木屋地区での『彼岸花を愛でる会』で知り合った産総研の方々や神戸大学から声がかかり、一緒に協力し合いながら大字誌を作ろうと言われました。それが大字誌作りに取り組んだ第一の理由です。

もう一つの理由は、双葉町の町づくりに役立てたいという考えに賛同したからです。この先、中間貯蔵施設の跡地利用に我々世代が関わることはないかもしれませんが、確かにそこにあった、その土地や気候に合わせた暮らしの様子を伝えることで、今後の町づくりの一助になればと願っております。

細谷行政区の役員方に声掛けをし、出来るだけ多くの話を集めましたが、載っていない大事な話や数字的にも正確でない部分が多少なりともあるかもしれません。しかし、中間貯蔵施設用地内にあった土地の歴史や文化、そして生活の様子が少しでも伝わるものになったのではないでしょうか。このような形で故郷細谷地区の記録が少しでも残せたことは私にとって大変意義深く、次世代に継承できれば幸いであります。

終わりに双葉町の早期復興とこの大字誌の作成にあたり多くの方々にご協力を頂いたことに対し、心より厚くお礼申し上げます。

双葉町細谷行政区　区長　田中信一

編集にあたって

本大字誌の作成については、彼岸花のご縁で編集者が細谷地区の大橋さん、田中さんを始めとした皆様と出会ったことがスタートでした。話に聞くだけでなく、現地を訪れ、震災後の変わりゆく細谷を見て、この地を今後訪れる多くの人が、地域の歴史を知る必要性があるのではないかと考えました。田中さん、大橋さんにもご賛同を頂き、多くの方からお話を聞かせて頂きました。また、羽山神社の例大祭やかしわ餅作りなど地域の文化もご一緒させて頂く機会を得ました。関係者の皆様に、まず改めて感謝申し上げます。

本大字誌は、細谷住民の方から伺った記憶を中心に編集しました。記憶というものは、主観的で、ましてや遠い過去のことであれば、必ずしも正確とは言えません。協力頂いた皆様の年齢や性別の偏りもあります。けれども、この大字誌では、客観的に正しい事実よりも、地域の営みや風景が、実感のこもった個人的なお話から伝わることをめざしました。より分かりやすく伝えるために、まず、記憶の背景である「基本情報」を、次に、「細谷の記憶」を掲載しています。細谷住民の皆様の思い出話の発端にしていただき、また、双葉町の復興、今後の地域振興に関わる方の参考になることを祈念します。

本大字誌に関連するインタビュー、編集、印刷、製本は産業技術総合研究所 領域融合ラボE-code予算および（独）環境再生保全機構の環境総合推進費（JPMEERF22S20930）により実施しました。双葉町役場、環境省にもご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

編集代表
保高徹生（産業技術総合研究所）

編集
大橋　庸一（双葉町細谷行政区）
田中　信一（双葉町細谷行政区）
保高　徹生（産業技術総合研究所）
金井裕美子（産業技術総合研究所）
五十嵐順子（産業技術総合研究所）

インタビュー実施者
保高　徹生（産業技術総合研究所）
坂原　桜子（元神戸大学／元産業技術総合研究所）
高田　モモ（産業技術総合研究所）
金井裕美子（産業技術総合研究所）

イラスト
五十嵐順子（産業技術総合研究所）

協力
藤井　新子（産業技術総合研究所）

目次

記憶地図
故郷への想いを託す
記憶の伝承に向けて
編集にあたって

第一章　細谷の記憶にまつわる基本情報……1
明治時代の細谷……1
細谷の人口の変化……1
細谷の川と海岸……1
太平洋岸長者ヶ原飛行場～塩田～原子力発電所……1
細谷の製塩事業……2
学校区……2
羽山神社……2
彼岸花の移植と「彼岸花を愛でる会」……3

第二章　細谷の記憶……4
飛行場跡地・原子力発電所……4
飛行場跡地……4
野球をして遊んでいた……4

かしゃっぱ（柏の葉）採り……4
原発誘致による部落四組（下組）の移転……5
原発建設工事（昭和四十二年：一号機着工）……5
原発工事関連の仕事（ダンプカーの運転手）……5
浜通りにずらっと発電所ができていった……5
大きな雇用の場となっていた（昭和五十年代以降）……5
原発関連の仕事（遮蔽コンクリートの納入）……6
原発構内での仕事（構内の環境整備の仕事）……6
サービスホールは遊び場……6
海岸……6
浜通りは砂鉄の産地だった……6
細谷の海岸で砂鉄採集……6
細谷の海岸で釣りをしていた……7
農作業の合間に近所の子ども達と海で泳いで遊んだ……7
細谷の海……7
川・ため池……8
フナ釣りをしていた……8
ザリガニやウナギを捕まえたり食べたりした……8
農地……8
戦後（昭和二十年代）の農業……8
昭和三十年代の農業……8

畑……8
農作業の合間の一服……9
乳牛……9
田んぼと会社勤務の兼業農家……9
養鶏場……9
自宅の周りの畑で自給自足……9
コラム：細谷の稲作……10
先祖代々の開墾……10
生活の中心、流通の中心……10
コラム：葉タバコ栽培……11
日本たばこ産業株式会社（ＪＴ）との契約栽培……11
葉タバコ栽培の一年（年中休みがない）……11
山林……12
敷地内にあった……12
キノコ（イノハナ・アミタケ・椎茸・ナメコ・松茸）……12
タケノコ……12
山菜……12
山菜採り……13
施設……13
羽山神社……13
屯所……13

自動販売機……13
コラム：羽山神社の再建……14
再建目前の震災……14
震災後の再建……14
通学路……15
冬場のしがんぼ（つらら）……15
家から学校まで五～六キロメートルくらい……15
自転車の三人乗りで小中学校に通学……15
山学校……15
ご近所の車で……15
集団登校……16
千葉商店（細谷外）……16
山ルート……16
細谷の年中行事……16
大字総会……17
花いっぱい運動……17
羽山神社の大祭……17
手休め……17
クリーンアップ作戦……17
盆踊り……17
隣組での葬儀……18

婦人会……18
慰安旅行……18
育成会（こども会）……19
家々の記憶……19
先祖は加賀からの入植者（藩政時代の終わり～明治の頃）……19
広い敷地……19
細谷に嫁ぐ……19
近所のおんちゃ……20
季節の手仕事……20
菩提寺……20
彼岸花……20
魚が美味しかった……21
スズメやイナゴを食べた……21
コラム：彼岸花の旅……22
双葉町の記憶……23
戦没者遺族会（双葉町）……23
町民号（双葉町）……23
冬至の柚子湯……23
コラム：かしわ餅作り……24
コラム：菰（こも）編み……26
地域語一覧……28

第一章　細谷の記憶にまつわる基本情報

記憶の背景である基本情報について町史や国勢調査などの資料、および直接関わった住民の方のお話に基づいてまとめました。

明治時代の細谷（口絵写真1）

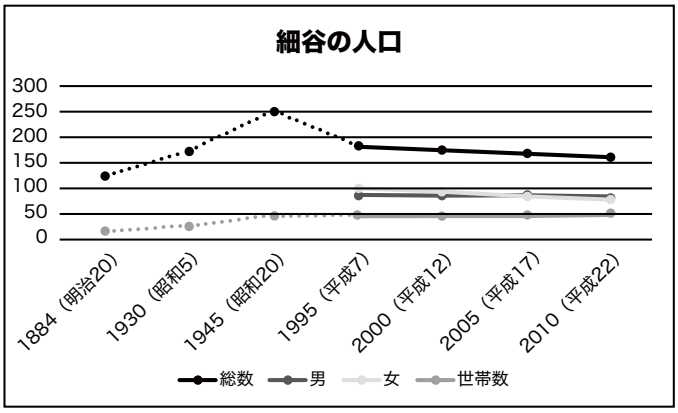
入植の時期として伝えられている明治時代前半の細谷村の地籍図が、福島県歴史資料館に所蔵されている。全図を見ると、現在の郡山地区の小字も含んでいたことが分かる。

細谷の人口の変化

天明と天保の飢饉の折に人口が激減し、浄土真宗の移民を受け入れたという経緯は、町史に詳細に記述されている。細谷への入植についての史料は見つかっていないが、町史に記された天明三年（一七八三年）及び嘉永元年（一八四八年）の検地の記録では、それぞれ「二軒」、「一人家無」とされ、非常に住民が少なかったが、明治二十年には、世帯数一六、総数百二〇人とされ、入植の痕跡が窺える。最近では、国勢調査によると、一九九五年に四九世帯一八五人、二〇〇〇年に四五世帯一七八人、二〇〇五年に四八世帯一六九人、二〇一〇年に五〇世帯一五九人だった。

細谷の川と海岸

細谷地区に流れる唯一の川は陳場沢（じんばざわ）川で、現在は、原子力発電所の敷地で途切れている。細谷の海岸は、阿武隈丘陵の東端が海に迫る断崖が続くが、発電所建設前の陳場沢川の河口は広い浅瀬になっていて水遊びができたという。細谷川という川もあり隣の郡山地区を流れ、郡山久保谷地と四郎田の境から海に注ぐ。久保谷地など郡山のいくつかの小字は、昭和七年の行政区画再編まで細谷に属していた。川の名前にその名残があるのかもしれない。



町史第３巻、第４巻、および国勢調査結果より作成

太平洋岸長者ヶ原飛行場～塩田～原子力発電所

第二次世界大戦中には、細谷から大熊町の夫沢にかけての一帯に陸軍の飛行場があった。戦後、昭和二十二年には大熊地区夫沢

の飛行場の跡地に、流下型塩田（五〇ヘクタール）が建設された。同年六月には送塩管が完成し、濃縮された海水が双葉駅西側に建設された製塩工場に送られ、大規模な製塩事業だったが、昭和三十四年塩田整備法により廃止された。その翌年の昭和三十五年、東京電力が原子力発電所の敷地として飛行場跡を選定した。原子力発電所の用地買収は、昭和三十八年～四十二年までに二期に分けて行われ、買収された用地は飛行場跡の塩田や原野の他に細谷を含む周辺の地域にもおよんだ。

細谷の製塩事業

細谷の中でも個人経営の小規模な製塩業が行われていた。昭和二十二年の「新山町工業所名調査」では、細谷の七事業所が掲載されている。

学校区

双葉町の小学校は北小学校と南小学校に分かれていて、細谷地区は南小学校。中学校は双葉中学校。南小学校は、以前は、現在の双葉中学校の敷地内にあり、昭和四十四年三月十七日に現在の場所に移転した。双葉中学校は、現在の双葉町図書館と町民グランドの敷地にあり、昭和五十三年に移転した。

昭和 22 年「新山町工業所名調査」に掲載された細谷の製塩所

工場名	工場所在地
井上製塩所	椴ノ木沢
古室製塩所	椴ノ木沢
田中製塩所	椴ノ木沢
遠藤製塩所	椴ノ木沢
羽山製塩所	椴ノ木沢
志賀東製塩所	弥平迫
舘林製塩所	椴ノ木沢

椴ノ木沢：だんのきざわ
弥平迫：やへいさく

羽山神社

細谷地区のほぼ中央の小高い里山に住民の心の拠り所として、鎮座する神社。東日本大震災前に社殿の老朽化により再建の話が進められていたが、工事着工を目前に地震によって社殿の屋根などが崩れ倒壊した。避難指示により立入も困難となるも、当時の区長が尽力して町や国に鋭意働きかけ、二〇一八年八月に社殿や参道の補修、鳥居の建て替えが完了。震災以前は一月、八月だった例大祭を二〇一九年から四月に行っている。表参道の途中の馬頭観音の石碑は、元々町道沿いに祀られていたものを神社修復の際に移動した。明治四十二年と刻まれ、先人達の信仰を伝えている。参道の入り口には大橋徳太郎さんが昭和六年に寄進した石碑

馬頭観音（羽山神社）

再建の碑（羽山神社）

がある。境内の石碑は、徳太郎さんの孫であり、震災後に神社の再建に尽力した大橋庸一さんが寄進した。

彼岸花の移植と「彼岸花を愛でる会」

二〇一一年福島原子力発電所事故以前に地域の美化運動の一環として、当時の大橋区長が自宅前町道の両側に彼岸花を植えていた。この彼岸花の球根が、二〇一八年に、環境省の協力を得て山木屋乙二区に移植され、同年秋から細谷行政区の役員等や「いわき・まごころ双葉会」、山木屋支援ＧＲＯＵＰ、および他地区の方も参加する行事として山木屋に集い「彼岸花を愛でる会」を開催している。

第二章　細谷の記憶

二〇二一年と二〇二二年に産業技術総合研究所と神戸大学が行った、細谷での生活の記憶に関する住民有志への聞き取り調査の回答をまとめたものです。いつ頃の記憶か、思い出せる限り表記しました。地域特有の言葉も残すように心がけました。巻末の地域語一覧と併せてお読みください。

飛行場跡地・原子力発電所

飛行場跡地（口絵写真4・5）

飛行場跡地を西武グループが買い取って（国からの払い下げ）塩田ができた。広く田んぼのようにして東側の海岸からくみ上げた海水を塩田で濃縮してから、双葉の駅の近くに五、六キロメートルの送水管で送った。それを煮詰めて塩を作った。学校帰りに送水管を修理しているのを見たことがある。後で東北レミコンができるあたりの町道、通学路が水浸しになっていた。送水管敷設は大変な工事だったと思うが、今ではもう何も残っていない。『いわき塩業』とかって名前だったと思う。（森の内、昭和二十～三十年代）

飛行場跡地はあまり木がなかったが、蔓（つる）になった赤い野イチゴが沢山あった。学校の帰りにそこまで行って弁当缶にいっぱい採って帰った。（森の内、昭和三十年代）

小学校の頃は学校行く時に弁当持っていくから、空になった弁当箱に野イチゴを採って帰りに歩きながら食べてた。（熊の沢、昭和三十年代）

野球をして遊んでいた

発電所ができる前、飛行場の跡地だった頃は何の管理もなかったので自由に入れていた。小学生の頃、学校が終わったら自転車で行って、だだっ広いところで野球をして遊んだ。（森の内、昭和三十年代）

かしゃっぱ（柏の葉）採り

五・六号機があるあたりに採りに行っていた。海沿いではどこでも採れた。五月末とか六月の初めになると柏の葉も割とおっきくなってちょっと硬めになって、かしわ餅にちょうどいい。柔らかいと包んで蒸しても剥がすのが大変だから、ある程度硬くておっきい葉っぱでないと包むのには使えない。

原発誘致による部落四組（下組）の移転

部落四組では土地を売った人が十軒いた。土地売買の条件が良かったことと、当時は放射能に関する知識もあまりなかったため、誘致に対しては反対もしなかった。十軒のうち二軒は細谷に残った。細谷内の移転先の土地は、町が買い、代替地として優先的に斡旋された。世帯数が変わって、葬式などの手伝いごとの人数が偏らないように各組を再編した。

部落４組内の様子

原発建設工事（昭和四十二年：一号機着工）

多くの人が働いていて、自分も十七歳から工事現場で仕事をしていた。当時は現場に何人か技術者がいて現地で技術を教えるような状況だった。農家の時はとても貧しかったが、現金収入が入るようになり、生活水準がぐっと上がった。

原発工事関連の仕事（ダンプカーの運転手）

港を作ったりする時に山から石を原料として港まで運ぶ運送業の会社に入っていて、ダンプカーの運転手をやっていた。第一原発での仕事が終わったら、次は富岡の方の第二原発、広野火発、新潟の柏崎刈羽（かしわざきかりわ）原発、女川（おながわ）の原発と全て仕事で行った。農家もやっていたので、遠方の現場には交代制で行っていた。

原発建設の時、掘削工事の現場

浜通りにずらっと発電所ができていった

元々、いわきの火力発電所があったが、広野火力、第二原発、第一原発、原町火発、新地火発と浜通り一帯が電源地帯となっていった。電気はみんな東京に行っていたので、日本の発展に貢献したなという思いがある。もちろん我々も潤ったけれども。浪江にも作ろうとしたけど色んな問題があって断念した。

大きな雇用の場となっていた（昭和五十年代以降）

原子力発電所に関連して仕事があったため双葉町近隣の町村はみんな潤っていた。原発の構内でも色んな仕事があって一日四千～五千人が働いており、近隣の町村からも働きに来ていた。町内の

三分の一くらいは東電の関連会社で仕事をしてたんじゃないかと思う。細谷地区でもいろいろな職業についていたが、三分の一くらいは東電関係の仕事をしていた。雇用の場があって現金収入があったので、車を買ったりオートバイを買ったりすることができ、生活水準が格段に向上した。

以前は、農閑期の冬場は仕事がないので関東の方に出稼ぎに出ることもあった。東電が出来て、働く場所が出来たから、地元に残って働くことができるようになった。

原発関連の仕事（遮蔽コンクリートの納入）

『東北レミコン双葉工場』では東電原発構内の関連建屋工事の大手建設業者に遮蔽コンクリートを納入していた。放射線の遮蔽としてレントゲンには鉛が使われるが値段が高いので、近くで取れる原料で厚さを出すことでカバーしていたのが遮蔽コンクリート。東北レミコン双葉工場は唯一資格者が常駐し、東電設計立ち合いで試験をして現場に納入していた。

原発構内での仕事（構内の環境整備の仕事）

東電の子会社の一つである不動産管理の会社で環境整備の仕事に携わっていた。一年に二回、構内の道路の両側の草を刈って火事の時に延焼しないように〝防災道路〟として整備する仕事や、松林の松枯れ防止の為の消毒作業、桜の木の手入れ、冬場には朝四時からトラクターでの除雪作業などを仕事でやっていた。芝生や植木の手入れには植木・造園系の会社が他にも三社か四社携わっていた。

サービスホールは遊び場

東電の敷地にあったサービスホールは、歩いたり自転車で行ける、結構離れてたけど遊ぶ場所だった。行くと鉛筆をもらえた。（昭和五十年代）

海岸

浜通りは砂鉄の産地だった

浜通りでは海沿いから山の方まで、一帯で良質な砂鉄が取れた。古代製鉄遺跡も分布している。細谷の自宅の畑からも鉄のカスが出てきていた。

細谷の海岸で砂鉄採集

細谷の海岸は砂鉄が取れる。砂鉄は色が黒くて比重が重いので、波で砂が運ばれて来たあとに残るのが見える。それを採って馬車で運んで貨車に積んで持って行ってた。大阪チタニウムという大

阪から来た企業が持っていってたと思う。（木通沢：きどおりざわ、昭和三十年代）

海岸に流れ着いている白と黒が混ざった砂を沢の河口付近の作業場まで運んで、砂鉄だけ選別して、どこかに出荷していた。コモロヨシオさんというおじいさんが個人でやっていたというのは覚えているが、企業と契約していたかはわからない。（葉の木沢、昭和三十年代）

砂は馬に引かせて運んでいたが、後にレールを敷いてトロッコに積んで運ぶようになった。子どもの頃、トロッコで遊んで脱線させたりして怒られた記憶がある。当時、砂鉄は包丁や鍬、鎌など刃物の刃の原料だったので、いいお金になったんだと思う。（葉の木沢、昭和三十年代）

傾斜のついた台の上側に砂鉄が混ざった砂を置く。柄杓で水をかけると比重が軽い白い砂だけ下に流れる。それを繰り返して白い砂を洗い流したら、コンクリートの上で天日干しする。三つ作業台が並んで置いてあって、水を流す人が三人くらいいた。（葉の木沢、昭和三十年代）

細谷の海岸で釣りをしていた

原発ができる前、海岸のところでは魚がいっぱい釣れて、街の方からも釣りに来ていた。原発ができてからは違うところで釣っていた。イシモチ（ニベ）やヒラガニが釣れる。冬にはモズクガニを汁にすると美味い。山に入って竹を取って釣竿を作って、釣り方は大人の見様見真似。（葉の木沢、昭和三十年代）

農作業の合間に近所の子ども達と海で泳いで遊んだ

隣近所の子ども達、十人も十五人も一緒に子どもらだけで泳ぎに行っていた。夏休みは家の葉タバコの手伝いがあった、昼休憩の時に海に行って遊んだまま帰らないでいると、じっじやばっばに怒られていた。子どもだけで遊んでいても、大きい子が小さい子の面倒を見ていたし浅いところで泳いでいたので、誰一人として溺れて死んだ子はいなかった。大人は子どもに構ってられないくらい仕事が忙しかった。（木通沢、昭和三十年代）

細谷の海（口絵写真6）

「細谷の海」と呼んでいた場所に友達と行っていた。子どもの頃は、水遊びをする場所で、大きくなってからは行って、ただ話をして過ごしたりした（おそらく、郡山の細谷川の河口付近）。（昭和五十年代）

川・ため池

フナ釣りをしていた（口絵写真7）

陳場沢川は六号線の近くから羽山神社の下あたりを通って海まで流れ出ている。幅は狭くて二、三メートル、広いところでも五メートルくらいしかない細い川。昔は魚も沢山いて、フナやウナギもいた。子どもの頃はフナを釣っていた。おじいさんが川魚を上手く焼いて食べさせてくれたのを覚えている。（陣場沢、昭和四十年代）

ザリガニやウナギを捕まえたり食べたりした（口絵写真8）

灌漑用のため池にアメリカザリガニがいて、釣って茹でて食べた。ウナギもとった。（昭和三十年代）

つつみ（ため池）には大熊のお兄ちゃんたちが釣りに来ていたので、ちょっかい出して遊んでもらった。（昭和五十年代）

農地

戦後（昭和二十年代）の農業

田んぼがあっても米一粒でもお金に変えようという時代だった。公務員の給料も月々何千円とかで、まだ米の値段もそんなに高くなかった。食べるものがなく、ご飯とサツマイモやカボチャを一緒に煮込んだりして食べた。着るものも、お盆やお正月に着る着物を買ってもらうくらいであとはボロボロの着物を着て過ごした。足袋も綺麗なままにしておくために普段は履くなと言われていた。みんなひもじい思いをして育った。

昭和三十年代の農業

細谷はあまり田んぼがなく、米が取れない分、畑で麦やジャガイモを作ったりして食料の足しにしていた。機械はなく馬や牛に田んぼを耕させたり、農作業も全部体一つでやっていた。エンジン付きの歩行用耕運機が出てからも、一軒で買うのは大変なのでみんなで借金して買った。契約農家は葉タバコを作ったり、各家で二、三頭乳牛を飼って牛乳を売るのが一番の現金収入だった。冬は東京に出稼ぎに行く人もいた。

畑

水のない高台の方が畑になっていた。葉タバコは契約栽培。収穫した小麦は農協に出したり、『うどん屋』と交換していた。『うどん屋』は収穫の時期になると各家を回ってきて、う

葉タバコの畑で

どんや粉と交換してくれる。小高の方から来ていて、お得意さんとして長年の付き合いがあった。

農作業の合間の一服

作業と作業の間に、一服といって軽い食事をしていた。ジャガイモを芋洗い棒できれいにして茹でて塩を振って食べたり、くず米の餅のつなぎにごんぼっ葉を入れた凍（し）み餅もよく食べた。

乳牛

牛乳を絞って入れた缶（二十～三十リットル）を集荷場に持っていくと毎朝車で回収に来る。毎月の現金収入だった。昔は機械もなく体を使った仕事だったので 疲れて朝寝坊してしまい、集荷に間に合わないこともあった。各家が敷地内に小屋を作って乳牛を飼っていた。牛の餌には稲藁（わら）や牧草、デントコーンサイレージ（サイロで発酵させた飼料）そして出荷できないクズ米を鍋で煮たものなどを食べさせていた。

田んぼと会社勤務の兼業農家

田んぼを持っていたが会社勤めをしていたので、いわゆる三ちゃん（じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん）農業だった。友達から中古の機械を譲り受けたりして、みんなの協力があって出来ていた。専業には程遠く、取れた米もなんぼかは割がいいので農協にも出したが、兄弟や親戚にあげたり、仕事の営業で持っていったりすることが多かった。（陳場沢・昭和四十年代～）

養鶏場

養鶏場が二箇所ほどある。大森の養鶏場では細谷の人が十人くらい働いていた。管本商店といういわきの株式会社か有限会社かが養鶏場をやっていた。今はもう建物は壊してしまった。（昭和五十年以降）

自宅の周りの畑で自給自足

自宅の周りに畑もあって野菜も育てていたので自給自足の暮らしだった。家内は野菜作りが好きで楽しんでいた。人から色々と教えてもらって種まきの時期とかよく知っていた。作ったのを職場の仲間にあげる喜びもあったんだと思う。

細谷の稲作

先祖代々の開墾（口絵写真2・3）

細谷では、先祖代々、丘陵地のわずかな谷あいを開墾して田んぼにしてきた。国営地だった土地を開墾して払い下げられた土地などで、稲作を行った。水は天水なのでため池も作られ、緩やかな傾斜を拓いた棚田が水を受けるようになっていた。他の地域では平らな土地に田んぼがあって、昭和後半に農地整備が行われたが、細谷の田は狭いので整備されなかった。しかし、時代が変わり会社勤めとの兼業が主になっても田んぼを営々と受け継いできた。

生活の中心、流通の中心

昭和前半くらいまでは、牛や馬で田んぼを耕していた。牛や馬がいない家は、飼っている家が手伝っていた。牛馬に食べさせるために、「朝草刈り」をしていた。農耕用の馬に乗って寺沢の神社の盆踊りに行ったという話も聞く。農具は、鍛冶屋で買っていた。鍛冶屋は新山村にあったと思う。

米は、伝統的に流通の中心で、売って現金に換える他に、魚屋の魚と米と交換するといった物々交換が成立していたと聞いている。

秋の収穫シーズンには集荷業者（通称「うどん屋」）も米を売ってくれと言って来ていた。一番いい米は出荷、真ん中の米は家で食べる分に置いておいて、くず米は、買い付けに来た『うどん屋』のうどんと交換できた。物々交換もできない米は、牛や鶏のエサにした。無駄がなかった。

ため池（黒色）から連なる田んぼ（明治時代の地籍図より）

葉タバコ栽培

日本たばこ産業株式会社（ＪＴ）との契約栽培

煙草の原料である葉タバコを畑で作って卸していた。全量買い上げだが、良いものを届けないとお金にならない。細谷の中で葉タバコを作ってたのは七、八軒、盛りのころは、十二、三軒。双葉町で最後まで作ってた家は昭和二十六年から六十年間作り続けた。

タバコは三年続けて作ると病気が出て収量が少なくなるので、自宅にある畑以外にも色々なところを借りていた。一〇アール（一反）で、干した葉を二五〇キログラム～三〇〇キログラム収穫して五十万円というのを目標にしていた。他の人を雇うと給料を払わないといけないので家族で人手を賄っており、子どもたちも中・高校生の頃は毎日仕事を手伝っていた。

葉タバコ栽培の一年（年中休みがない）（口絵写真９・10）

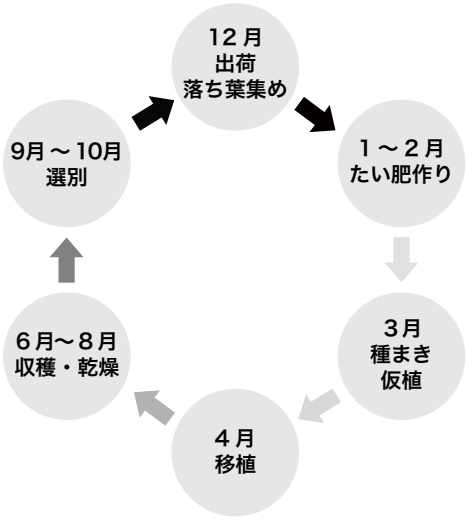
三月の作業から移植までは共同の育苗ハウスで作業・管理をする。発芽は農家によって差があったため品質を一定にするためにタバコ組合が共同のハウスを設置した。

四月には苗を自分の畑に移植する。畑に黒マルチを張って苗を植えるのを、昔は手作業でしていたので、機械化して本当に楽になり栽培面積も広げることが出来た。

畑で育てている間は、風で傾いたら起こさなければならず、大変な仕事だった。

夏の収穫は、二十枚くらいの葉が育った順に、育ちすぎたり傷んだりしないようにいいタイミングで取って、縄に挟んでパイプハウスに干す。子どもたちが高学年になると、縄に葉を編み込む作業をしていた。

乾燥したタバコは、縄から外して〝こも〟に包んで保存するので、〝こも〟編みは、冬場の作業だった。途中から徐々に栽培面積を縮小したので、新しい〝こも〟がいらなくなって作らなくなった。パイプハウスがなかった時代は、外にタバコの葉を干していて、小雨が降るときには〝こも〟をかけていた。



タバコ栽培の一年の作業

山林

敷地内にあった

一軒一軒の土地が広くて山にもかかっていた。フキノトウやタケノコが採れた。子どもの頃は遊び場で、竹やぶに基地を作った。

キノコ（イノハナ・アミタケ・椎茸・ナメコ・松茸）

キノコの採れる場所は〝シロ〟と呼ぶ。人には教えない親子でも教えない。震災直前にシロをばあちゃんから引き継いだばかりだった。

時期になると胞子でどんどん増えるから毎日採っても毎日出てくる。秋に採って塩漬けにしておくと一年中食べれる。

震災の一、二年前、道路沿いにアミタケが生えるようになった。おじいちゃん（義父）の好物で、一日二回取りに行って、茹でて冷凍していた。ニンニク醤油で味付けしてお酒のアテにしていた。避難の時に持って行かなかったので、いまでもおじいちゃんが「あのアミタケはいたましかった（残念だった）」という。

椎茸やナメコは、自宅用に栽培していた。余った分は人にあげる。椎茸やナメコは、二年に一回三十本ぐらいコマを打つ（菌を植える）と、毎年取れる。家の山があったから木陰に置いとくと生える。孫と一緒にやってた。椎茸は、春と秋に二回できて春の方がたくさんできる。干して保存する。ナメコは一年に一回十一月頃、霜が降る頃にできる。二年ぐらい経つと上に落ち葉が積もってざっくりできるようになる。ナメコは塩漬けにする。

浜の方にあった山や羽山神社の参道の所でも松茸を採った人がいた。

タケノコ

タケノコは買って食べるもんではなくて、採ってすぐの新鮮なタケノコを頂いて食べていた。新鮮だから茹でこぼさなくてもえぐみがなく美味しい。

家の裏山に竹やぶがあって、退職後に思い立って日光が入るように手入れしたら太いタケノコが増えた。

山菜（口絵写真11）

東電の敷地になった山の方でも昔はワラビやゼンマイを採ったりしていた。自分が小さい頃（戦後の頃）は食卓に山菜が並んでいるのが当たり前だった。山菜はそこら中で採れる。ワラビやゼンマイ、少し林を入っていくとタラノメやコシアブラもある。天ぷらにすると美味しい。

ノゼリは田んぼを耕す前にいっぱい出てくるのを採って食べていた。セリ鍋にして食べる。細谷の中でも湿潤なところには年中セリがあった。冬は枯れてしまうけど。

養鶏場の前の林にはアケビや黄色い野イチゴがあった（黄色いのは甘いので人気）。

山菜採り

GWってなると山菜採りだった。嫁さんと二人で、山の奥深くまで入っていかなくても林の中を歩いていればいっぱいとれる。天ぷらにして食べる。ワラビとかゼンマイなんかは取れすぎるから塩漬けにしておく。取れる場所は自分で見つけてくる。

ゴンボッパやヨモギをとってきてもちに入れた。（昭和五十年代）

施設

羽山神社（口絵写真12）

羽山神社は、細谷地区の先人たちが建立した心の拠り所。境内は子どもの遊び場になっていて盆踊りも行われていた。

昔の羽山神社は、後に双葉ゴルフガーデンが建設されるベンケイ山にあった。太平洋の方を監視する日本軍の施設が作られたために現在地に移転したと聞いた。

細谷の道路は東電の通勤路になっていたので、夕方五時以降は車通りが多かった。土日は休みで車通りがないから、毎週土日は羽山神社の上まで上がるのが愛犬との散歩コースだった。いつも同じコースを行くので、愛犬も道を覚えていて、車通りのない土日はリードを外して、散歩させていた。神社の上まで上がって、境内のところで少し体を動かして帰る。愛犬はおとなしく、避難先でも近所の方々から可愛がられていた。

羽山神社の裏にキノコのシロ（毎年とれる場所）があった。

屯所（口絵写真13）

双葉町の中で地区ごとに消防団の分団が分かれいて、郡山行政区と細谷行政区が同じ地域割りだったので統括して四分団になった。部落の消防団、細谷分団は団員が八人いた。火災の見回りをしたり、夜に拍子木を鳴らして火の用心を促したりしてこの部落を守っていた。原発事故の時も、区長と消防団とで四六戸の安否確認をした。原発事故の前の年に区長が自主防災組織を双葉町行政区で三番目に立ち上げ承認され、今年は訓練をやろうって機材を全部揃えた年の事故だった。機材は全部新品だったから山木屋に寄付した。

自動販売機

羽山鉄工所の前に自動販売機があって、お小遣いで飲み物を買いに行くのも遊びの一つだった。（昭和五十年代）

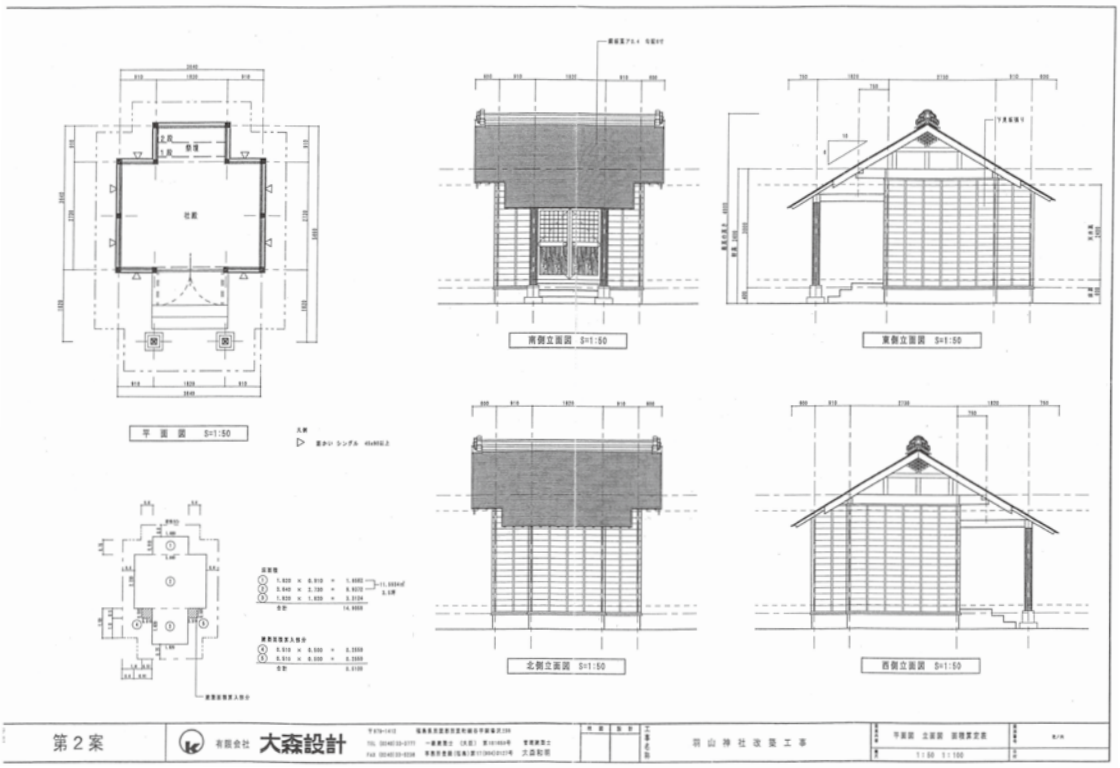
羽山神社の再建

再建目前の震災（口絵写真14）

震災前に老朽化していた社を立て直そうとしていた。八畳くらいにして拝殿も広くなるはずだった。細谷の大森設計士に図面を引いてもらって見積もりも出してもらった。基礎打ちや木材の準備など、出来るところは自分たちでしようと、親戚の山から切り出した木を四トントラックで運んだりもした。一月に大字会の承認もとって再建目前の震災だった。

震災後の再建

二〇一一年の東日本大震災によって社殿の屋根などが崩れたが、避難指示のため、計画していた再建はかなわなかった。一方で、中間貯蔵施設用地の買収が進められた中で、羽山神社の敷地は、地権者が入り組んでいたために残され、震災発生当時の大橋区長が懸命に関係再建された（営業経験が思いもよらず役立った）。町行政等に働きかけて、環境省の支援を受けるなどし、二〇一八年八月に現在の姿に再建された。震災前は一月と八月に行われていた例大祭を二〇一九年から四月の年一回とし、各地から住民が参集する。



新社殿設計図

通学路

冬場のしがんぼ（つらら）

昔はもっと寒く雪も降ってたから、棚田の所にしがんぼ（つらら）ができて、朝学校に行くときにバリバリと壊したり、食べたりして遊んで、学校に遅れそうになっていた。透明な氷だから食べると美味しい。（陣場沢、昭和30年代）

家から学校まで五～六キロメートルくらい

学校が始まる時間にまともにつかず、一時間目に間に合わなくても先生も怒らなかった。バスも通らない、自動車もなく、自転車も一家に一台くらいしかなかったような時代だったので歩いて通うしかなかった。通学路も今みたいに道路が舗装されているわけでもなく全部が砂利道だった。六号線の東側にある町道を通って学校まで行っていた。岩を削った道（割山の道）を通ると、両側の岩に穴があって、おそらく戦争中の防空壕であったと思われる。人が住んでいたこともあった。おっかなくて、走って通っていた。（陳場下、昭和三十年代）

自転車の三人乗りで小中学校に通学

自分の家は自転車を買ってもらえなかったが、隣近所の裕福な家の子が自転車を買ってもらっていたのでこれに便乗して三人で前と後ろに相乗りしていた。小学校高学年の頃、雨の日に神社の近くの下り坂で、自転車一台に三人で乗ってるからブレーキが効かず、下の田んぼに落ちて泥だらけになって帰ったことがある。「うちの自転車で、田ぼさ落ちてぇ」だなんて怒られて、親たちが謝りに行ってたのを覚えてる。（椴木沢、昭和三十年代）

山学校

海の近くから通っていた子の中には、通学路の途中にある山を『山学校』だなんて呼んで、学校に行かずに遊んでた子もいた。遊んで、弁当食べて、みんなが帰る頃に一緒になって帰る。親も学校には年一回くらいしか行かないからバレない。小鳥を罠にかけて獲ったりして遊んでいた。獲ったのは家で飼ったりしていた。（椴木沢、昭和三十年代）

ご近所の車で

子ども達は小学校まで歩いて二十分くらい、中学校は坂の上にあって自転車で通っていた。小学校に通う時も朝はみんな一緒に登校班で行くけど、帰りは寄り道して山で遊んで帰ったり、みんなバラバラの時間に帰ってくる。買い物帰りのおじいちゃんとか、

仕事帰りのお父さんが途中で車で拾って乗せて連れて帰ってくれたりしていた。車の運転ができなかったので、雨が降った日とかに子どもが公衆電話から迎えにきてと家に電話してきた時、自転車とかバイクで行くしか足がなかったけど、部落のお父さんが子ども達みんなを乗せて、部落内の各家をぐるっと回ってみんな送り届けてくれたりして、とても助かった。車に乗せれるだけ子どもを乗せていて、車からうちの三兄弟がみんな降りてきたりしたこともあった。（昭和五十年代～）

集団登校

朝は十文字と呼ぶ交差点に集合して集団登校していた。班長さんが持っている旗に憧れていた。

千葉商店（細谷外）

通学路にある千葉商店には公衆電話があって、雨が降ったらそこから家に電話をしていた。お菓子も売っていて買い食いも楽しみだった（告げ口されると学校で叱られる）。トイレも借りることができた。（昭和五十年代）

山ルート

小学校からの帰り道、郡山の山を抜ける山ルートをわざわざ遠回りして遊びながら帰っていた。途中に遺跡があるところで年輪模様の化石を拾うのが面白かった。（昭和五十年代～）

細谷の年中行事

主な行事と時期	
１月１日	大字総会
１月８日	羽山神社春の大祭
１月旧正月	双葉町ダルマ市
５月下旬頃	花いっぱい運動
５月下旬～６月上旬	農業が一段落したとき各家庭で かしわ餅作り（手休め）
７月中旬頃	クリーンアップ作戦（草刈人足）
８月13日	羽山神社秋の大祭 細谷盆踊り
９月上旬	町民大運動会（反省会が最高） （口絵写真 17）

※平成８年以前　葬祭は各組手伝い

大字総会

一月一日に大字細谷の通常総会が開かれていた。議事が終わって乾杯のあと飲み会になって、新区長宅に上がり込み二次会で盛り上がり、新春の楽しみだった。

花いっぱい運動

六号線沿いの東北レミコンより下ったあたりに町のお知らせを貼る掲示板があった。そこの空き地で花を植えた。住民の手作りの竹ぼうきを地区内の中小企業、何箇所かに持って行って〝環境協力金〟を頂いて、花いっぱい運動の資金にしていた。

羽山神社の大祭

羽山神社の大祭は、一月八日と八月十三日に行われていた。震災で中断し、二〇一九年に、年一回、四月の例大祭として再開した。

春の大祭・2022 年 4 月撮影

手休め

五月の田植えが終わったころ、手休めで農家の家は柏餅を作って食べた。農作業が一段落した時に作るので、家々で作る日は違う。大体作り方は同じだけど知ってる家におすそ分けしたり。一人で十個くらい食べるし、他にも配るから一日で一〇〇個も二〇〇個も作っていた。あの頃は甘いものもあまり無かったし、子どもらはいっぱい食べれるから楽しみにしてる。餅を生の葉っぱで包んで蒸籠（せいろ）に入れて蒸す。あんこも入って、餃子みたいな見た目をしている。旨かったど。

殆どの農家の家には柏の木が植えてあった。良い葉っぱができなくて、近所の家から柏葉を貰うこともあった。

クリーンアップ作戦

クリーンアップの時に東電の通勤路だった道の掃除をしていた。カップのお酒や空き缶のゴミが多くて一度東電に陳情書を出した。陳情書を出したあと一時期はマシになったが、働く人が定期的に入れ替わるので、結局またゴミが増えて、という感じだった。

盆踊り（口絵写真15・16）

昭和二十年代ごろまでは、羽山神社の敷地にやぐらを立てて盆踊りをやっていた。昔は九月八日頃にやる秋祭りだった。境内でやっていた頃、『焼きスルメ』を売っていて、とても美味しかった。

うるかした（水につけた）スルメに醤油をかけて焼いたもの。何かと昔のお祭りごとにはつきものだった。その後、一度は地区の盆踊りが無くなった。

昭和六十年頃、盆踊りのない地区はここだけだと有志が立ち上がって、上の年代の人たちと一緒にまた再開した。八月十三日あたりに細谷の公民館の前の広場で盆踊りをやっていた。行政区四六軒しかないけど素晴らしいやぐらを新築して盛り上がった。団結力がある地区だった。

「子ども盆踊り」が双葉十六の行政区の中で唯一で自慢だった。小学校に入ると「唄」「横笛」「大太鼓」「小太鼓」を練習する。練習は細谷の公民館でやっていた。練習の時も毎回、子ども達はジュースをもらったりしていた。「盆踊り」の時は公民館の前にやぐらを立てて、登って演奏できるのは十人くらいのスペースしかないので、子ども達は並んで順番待ちをしていた。小さい子から順にやぐらに上がって、疲れたら大きい子に変わっていった。

隣組での葬儀

平成八年頃までは各家々でしていた。それ以降は今のように葬祭場でするようになった。昔は隣組みんなでお手伝いして料理を作ってお葬式を出した。隣組長がリーダーになって仕切る。家主から大体の人数を聞いて、隣組の女の人はみんな朝三時ごろに起きて準備をしていた。料理は、にしめを煮たりきんぴらごぼうを作ったり、白和えやおでんやおふかしを作る。宗派にもよるが仏事だから生臭いものは使わなかった。

隣組でのお葬式の様子

婦人会の旅行

婦人会

盆踊りや町民運動会の時には男性の集まりがあるが、女性は婦人会があって、月に一回集まってお茶を飲んだりしていた。他の所から嫁いできた人ばかりだった。

慰安旅行

双葉町の町民号とは別に部落での慰安旅行があった。飯坂温泉

に行った。「吉川屋」という高級旅館に行ったのを覚えている。

育成会（こども会）

夏休みに入ってから（七、八月頃）、ハワイアンズに電車で行っていた。プールとか遊ぶ所が揃っているので、最後に集まる時間だけ決めて、子ども達は子ども達で遊ばせて、大人達は飲んで喋ってする会をやっていた。ハワイアンズは持ち込みが出来ていたので、家からおにぎりとクーラーボックスにジュースを入れて子ども達の分を持って行っていた。中で買うと高いから。こども会では四月に年間の行事予定を立てていた。部落（小字）全体で多い時には一〇～一三人子どもがいた。

家々の記憶

先祖は加賀からの入植者（藩政時代の終わり～明治の頃）

相馬藩では天明・天保の飢饉で沢山人が亡くなり、人が欲しかったところをお寺（浄土真宗）が仲立ちをして加賀から入植した。「隠れながらきた入百姓」と言われているが、そうでもなかったとの資料もある。条件の良い平地は早く来た人が既に入植しており、遅く来た人が細谷のような山の中で何もない大変なところに入った。

先発隊の所を頼って、居候や下働きをして（〝わらじぬぎ〟として）入植した。昔は、新立（しんだち）・ぬく新立とよばれ新しく来た人だからという差別があったが、敗戦後の改革で大地主がいなくなってそのような差別は無くなった。

大森とか大橋とか館林、鈴木って四軒か五軒かが先発隊として昔入植した。

広い敷地

一軒一軒の敷地が広い。畑と山が一緒になったところに、それぞれ家がぽつんぽつんとあるような感じだった。

細谷に嫁ぐ

細谷に嫁いで来た。義祖母、義父、義母、夫、夫の兄弟、それから子どもも生まれた。元々農家の生まれではなかったので、細谷に来てから農業を手伝うようになった。右も左もわからない中で、大ばあちゃん（義祖母）が色々と教えてくれてよくしてもらった。

農機具のことも本当に何も分からなかったので、田んぼで『フォーク持ってこ』と頼まれた時、三又の鍬の事だと分からず、食事で使うフォークを持って行って、その時も『違う違う』と大

ばあちゃんに教えてもらった。

昔は五右衛門風呂を焚いていたが、火起こしもやったことがなかったので、全然火が付かなくて大変だった。お父さん（義父）が仕事から帰ってきた時にお風呂が間に合わないということもあった。大ばあちゃんから『ペットボトルに灯油入れてくべたらいいんだ』とアドバイスをもらって、一瞬火がついても、木の置き方や入れる順番が悪かったのか、水が温まるほどには至らなくて結局間に合わなかったり、という感じだった。火起こしは、燃えやすい新聞紙に火をつけて、木の葉を燃やして、木を組んで、そこに灯油をかけて、木をくべていく。灯油を入れると燃えやすくなるが、燃え続けるように木を組んだりするのはコツが必要で難しかった。

近所のおんちゃ

ご近所のTさんは頭にタオルを巻いていたので『ハチマキのおんちゃ（おじさん）』と子ども達に呼ばれていた。子どもが悪さしてると怒ってくれる大人がいた。『今日ハチマキのおんちゃに怒られた』と言って子どもが帰ってくることがあったが、それはうちの子が悪いことをして怒ってもらえたんだというのがわかっていたので、『それはあんたが悪い』と言っていた。部落全体で子ども達みんなの面倒を見てくれていた。お嫁さんは色んな所から嫁いで来た人ばかりで、部落のことは分からないから、そうやって面倒を見てくれてとても助かった。

季節の手仕事

初夏に一日農作業の「手休め」をしてかしわ餅を作っていた。六月には梅を漬けた。小さい梅や大きい梅、いろいろな種類の梅が敷地内に植えてあった。秋には柿。ヘタの所に焼酎をつけて袋に入れて置いておくと渋が抜けた。農閑期には、藁でこもを編んだり、竹でかごを作ったり一年中手を動かしていた。

菩提寺

双葉には浄土真宗の寺が二つあり、東本願寺が正福寺、西本願寺は光善寺。細谷は東本願寺系の人が多い。加賀から移住するころ浄土真宗は一つだったので、加賀の人が東系というわけではない。

彼岸花

昭和十九年に横須賀のお医者さん一家が疎開しにきた時、思い出として持ってきていた彼岸花を裏山に植えた。細谷に元々彼岸花はなかった。たいして気にしないで毎年咲くなあくらいに思っ

ていた。震災の三年くらい前、裏山を綺麗にしたら日が当たるようになって彼岸花もいっぱい咲くようになり、ちょうど家の前の町道（細谷のメーン道路）に植えると良いなと思ってコツコツ植えた。震災後に一時帰宅する人が、彼岸花咲いてたよって教えてくれた。

魚が美味しかった

生鮭は請戸（うけど）の親戚からもらうので買わなかった。ある年は米袋いっぱい、五、六尾の鮭をもらって、切り身にして、塩漬けや味噌漬けにして冷凍した。

請戸漁港は生しらすが名物だった。震災までは生しらすが獲れるのは請戸が北限（最北端）だった。震災後、避難した漁師の方が気仙沼の方でも生しらすが獲れるよう試行錯誤して今では気仙沼でも獲れるようになっている。

さんまは、季節になると昔は安かったからいっぱい買って、庭の炭窯で作った炭で焼いて、夕方からビールを開ける。農作業で忙しいって言ったって、毎日朝から晩までというわけではないから、たまにはそんな日があった。一人で何匹も食べれるほどあった。

大熊の梅田商店で安い魚が手に入るので、丸ごと買って自分で捌いた。ドンコは傷みやすいから内陸では売っていない。煮つけると美味しくて、おじいちゃんやお父さんは内臓が好物。タラは煮つけると、おじいちゃんやお父さんは頭が美味しいという。カツオは刺身と焼き漬け。我が家風は、焼かずに油で揚げたのをめんつゆに漬ける。

請戸から生鮭やさんまを大きな樽に二杯分くらいもらってきた。『どうせ投げるもんだから』と言って頂けていた。昔は魚も沢山獲れてたんだと思う。もらった魚は『塩引き』する。塩を振って一匹ずつ吊るして乾燥させる。食べるときはそのまま食べる。しょっぱいのが良くて一切れでご飯三杯いけるくらい、いいおかずになった。

スズメやイナゴを食べた

大人が狩ったスズメを食べたことがあるが、焼いたらコリコリして大変美味しかった。イナゴも食べてたし、珍しい話じゃない。粗食だったから丈夫な身体をしてる。

秋恒例の小学校のイナゴとり大会があった。学校の釜で茹でて、各家庭から一キロいくらで注文をとっていた。収入は学校の教材などの購入にあてた。（昭和三十年代）

彼岸花の旅

（口絵写真18）

敗色が濃くなりつつあった太平洋戦争の末期に、横須賀のお医者さんの家族が、双葉町細谷のある民家に疎開してきました。その折、熱さましの湿布に効能があるとされる「彼岸花の球根」を持参し、屋敷裏山に植えたそうです。その彼岸花は、群生して毎年の秋には、人目に触れる事は無く立派にいっぱい咲いていました。

平成十九年に私が地区行政区長になり、地域の環境美化に取り組みましたが、その一環として、彼岸花の大小球根を原発事故二年前の早春に地区内の町道約一五〇メートルの両脇へ独自に二日間にわたり屋敷裏から移植しました。

咲くのが楽しみでしたが、原発事故で、緊急避難となり、さらに細谷地区のほぼ全域が中間貯蔵施設エリアとして、国有化され二度と細谷に戻ることはありませんでした。避難二年目の秋に一時帰宅した細谷の方々から、「区長さん彼岸花がとてもきれいに咲いてるよ～」との連絡を頂き、大変嬉しく、故郷への郷愁がより鮮明に脳裏を過りました。

平成二十九年楢葉（ならは）町で開催された、「ダイアログセミナー」に参加した事がきっかけとなり、川俣町山木屋の菅野源勝さんと出会いました。山木屋でのセミナー開催時に菅野さんは、山木屋に四季折々の花を咲かせ人々を呼び込みたいと発表されました。その折私が中間貯蔵施設エリアの彼岸花が工事で埋められる運命なので山木屋への移植を菅野さんに提案したところ、即座に賛同を頂き、セミナーで報告しました。双葉町役場、環境省にその旨を説明、全面協力を得て、大小約三千株の山木屋への移植が実現、「彼岸花を愛でる会」開催に至りました。掘り起こしから、山木屋への移送はNHKテレビで放映されました。過酷な原発事故がもたらした出会いが、彼岸花を通じこのような形になり、事実は小説より奇なり、思いがけなく、とても有意義な交流が広がった事に、感無量です。

（大橋庸一）

細谷の彼岸花　年表

第二次世界大戦のころ
横浜から細谷に疎開した医師が彼岸花を持参

2007年		道路沿いに彼岸花を植える
2011年		福島第一原子力発電所事故、全町避難
2013年		彼岸花開花の便り届く
2015年		中間貯蔵施設建設の容認
2017年		ダイアログセミナー※山木屋で開催
2018年	1月	細谷から山木屋へ防災用品寄付
	4月	谷から山木屋へ彼岸花移植
	9月	「彼岸花を愛でる会」開催

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

2022年	10月	「第５回彼岸花を愛でる会」開催

双葉町の記憶

戦没者遺族会（双葉町）

双葉郡の持ち回りで年に一回、慰霊祭があった。双葉町遺族会は会議を年一回開催し、旅行にも行っていた。温泉巡りで一泊したり。昔は遺族会の資金が潤沢にあったので良いところに行っていた。二〇二〇年あたりに双葉町の戦争未亡人がいなくなり、青年部はあったが、戻って活動はできないからもう解散しようとなって解散した。

福島県の戦没者遺族会も年に一回、慰霊祭があった。県知事が来て弔意を述べるセレモニー（政教分離だから知事は挨拶だけして帰る）と神式・仏式で遺族会主催の慰霊祭をやる。結構大掛かりな集まりだった。

町民号（双葉町）

臨時列車を貸し切って一泊して帰ってくる。これは、特急列車を双葉駅に停車してもらうことと、双葉町民の相互交流を目的とした行事だった。毎年楽しみにしている町民も多かった。二〇〇～三〇〇人規模で行っていた。会社の慰労会とか田んぼの泥落としに利用されていた。

冬至の柚子湯

我が家（大橋）に樹齢百年前後と推定される柚子の木があり、なっていた実を毎年冬至の頃、柚子湯にと思い当時理事をしていた老人ホーム「せんだん」にいっぱい届けた。

かしわ餅作り

農作業が一段落した初夏、各家で決めた「手休め」の日には、かしわ餅を作りました。原子力発電所用地では、もちを包むかしゃっぱ（柏の葉）が採れたそうです。葉っぱ採りは、わらし（子ども）の仕事で、たくさん作ってもらうために頑張りました。各家庭で食べる他に隣近所や親戚などに配る習慣があり、家によっては、一〇〇個も二〇〇個も作りました。

材料（約150個分）

- 柏の葉 150枚以上
- もち粉 1kgくらい
- 米（うるち）粉 もち粉の三分の二くらい
- 水（粉500gに300cc強）
- こしあん 1・5kgくらい

作り方（口絵写真19）

【前日】

① 柏の葉を採る。

② 餡（あん）を作る。茹でた小豆をざるで濾して砂糖を入れて煮詰める。餡は蒸したときに水っぽくなるので少し硬めに。

【当日】

① 柏の葉の柄の方を数センチ切り落とし、表と裏をよく洗って拭く。

② もち粉米粉（3：2）を混ぜ、水（粉500gに330cc）を少しずつ入れてよく練る。

③ ②（約60gほど）を掌に楕円にのばして餡（約40g）を挟んで閉じる

④ ③を柏の葉で包んで蒸し器に、少し隙間を開けて並べる。

⑤ 出来あがり。

⑥ 葉っぱを開いて中の餅を食べる。

かしわ餅作りの写真は、田中晴子様（細谷）、石田由喜子様（寺沢）にかしわ餅作りを再現頂き、撮影しました。また、柏の葉は菅野源勝様（川俣町山木屋）に提供頂きました。

菰（こも）編み

細谷で盛んだったタバコ栽培には、菰が欠かせなかったそうです。屋外に干していた頃には雨除けのために、パイプハウスで乾燥するようになっても、乾燥した葉の保存などに使いました。冬の落ち葉集めから始まり一年中続く作業が少し落ち着く一月頃、その年に足りない分の菰を編みました。

準備

藁に残った葉と根元の葉鞘を取り除く。

木枠を用意し、上部の四つの切れ目に編みひも（2mくらい）をかける。

編む

① 藁の根元が外側になるように木枠の横木に三、四本沿わせる。

② 端から二番目の向こうに垂れた紐を手前、手前の紐を向こうに、交差させて藁を編み込んだ紐をまた切れ目にかける。

③ 端から一番目の紐も、②と同じ手順で藁を編み込む。

④ ①と反対側の端が根元になるように、藁を横木に沿わせ、②、③と同じに編む。

⑤ ①～④を繰り返し、最後に交差した紐を枠にかけずに結ぶ。紐を交差する時に向こうと前の紐の交差する側（右左）を変えないように注意。

かつて、藁鞘はほぐして布団の綿代わりにされたそうです。無駄のない生活でした。

地域語一覧

地域の生活の中で受け継がれてきた言葉です。他にもたくさんありますが、思い出せた範囲で一覧にしました。

（アイウエオ順）

アイヤ：（驚いた様子を表す感動詞）「あいやたまげたな」
アッチャ：あちら
アンチャ：姉
アンニャ：兄
イタマシイ：惜しい
ウルカス：水につける
オメ：あなた
オライ：私の家
オラホ：私のところ
オンツァ：おじさん
カイチャ：裏返し
カシャッパ：柏の葉
カンカチ：火傷
ケ：食べなさい
コ：来なさい
コウノゲ：眉毛
コグ：言う「うそこぐな」
コッチャ：こちら「こっちゃこ」
コデラネ：言葉もない、最高だ
ゴンボッパ：山野草のオオヤマボクチ
キャンデ：（かき氷を固めた棒アイス。ソーダ味五円小豆入一〇円の記憶あり）
サレエ：（勢いのいい様子）「されえころんだ（すっころんだ）」
シガル：凍る
シガンボ：つらら
シタギ：唾液
ジッジ：おじいさん
シッチャケル：破ける
シャッコイ：冷たい
スエル：（物が）変質する「なんだこれ、すえてっど」
ズルズル：（のんびりしている様子）「ずるずるしてらんねど」
ズネエ：大きい
サスケネエ：大丈夫だ
ダベシタ：だろう
タマゲル：驚く

タンガク：持ち上げる
チンチ：小さい
テンデンコ：別々
ナゲル：捨てる
ハア：（語気を和らげる語尾）「んだからはあ」
バッバ：おばあさん
ヒジャカブ：膝
ニシャ：お前
マナグ：目
マブル：見守っている「まぶってねえで手伝え」
ワ：自分
ワラシ：子ども
ンゲ：行け「あっちゃんげ」
ンダ：そうだ

本地域語一覧を作成するにあたって、伊藤正彦氏の著書「伊藤さん家の母の味」（歴史春秋社、二〇一八）を参考にさせて頂きました。

大字誌　細谷

発行日　二〇二三年六月二十二日

編集・発行　産業技術総合研究所　地質調査総合センター
地圏資源環境研究部門

印刷所　株式会社ＣＩＡ
福島県伊達市梁川町やながわ工業団地九十・一
ＴＥＬ：〇二四・五七七・〇〇七五

本誌記事写真等の無断転載を禁じます。

出版番号　ＡＩＳＴ２３ＩＸ００００１